

HPVワクチン接種後に 多様な症状を生じた患者

順天堂大学 麻酔科学・ペインクリニック講座

井関雅子

症例 13歳(初診時) 女性

既往歴 なし

初診: X年 5月

HPVワクチン接種歴: 3回接種

- HPVワクチン接種痛: ふだんの注射と同じ痛み
- その他の症状:
 - 1回目 X-2年5月: 発熱と多汗 11歳時
 - 2回目 X-2年7月: 全身倦怠
 - 3回目 X-1年12月: 全身倦怠
- 3回目の接種1週間前から胃腸症状あり体調不良であったが接種。その後全身倦怠→〇〇小児科受診 ワクチンの副反応として経過観察 数日で軽快

症例 初診時 13歳 女性

現病歴

- X年3月 体育系クラブ活動で合宿:交通機関使用
車酔い、両下腿痛、右上腕痛、脱力感、倦怠感、頭痛
→ 部活継続 諸症状は2日間で軽快
- 両下腿痛、右上腕痛残存→〇〇小児科(前医)受診
- △△整形外科でレントゲン:異常なく症状軽減
経過観察 とされていた.
- X年4月末:母親が心配して当科希望
〇〇小児科 △△整形外科より紹介状あり

症例 13歳(初診時) 女性

主訴

- 両下肢の脱力感 が主症状
- その他として 両上肢痛＋ 左下腿痛
- 痛みの強さMax Min Ave: 3 今日あまり痛くない

現症

160cm 50kg

- 運動・感覚系:MMT ROM 反射正常 知覚障害なし
- 平熱

- 初診時間診票 HADS-A:2 HADS-D:2 PDAS:1 PCS:17

症例 13歳(初診時) 女性

初診時

患者の日常生活

- 痛みのために学校を数回休んだ。
- 体育の授業: 数回欠席 現在は参加
- クラブ活動: 球技の部活に所属 活動継続
- 趣味: 音楽鑑賞 現在楽しめている。

患者の気持ち

- 痛みや脱力は軽減してきているという感触はある。

母親の気持ち

- 痛みや脱力が心配
 - 1) 今後どうなっていくかが心配
 - 2) 娘は、重篤なのに我慢しているのではと心配
 - 3) 体育などができない場合など、成績にも響く。受験もあるので心配
 - 4) 必要な検査があれば希望。原因を知りたい。

症例 13歳(初診時) 女性

初診時

患者へのアドバイス・指導

- 原因ははっきりしないが、症状は軽減してきていることに安心感を感じて下さい。
- まずは、現状を維持していくことを目標にして下さい。
→1) 授業(体育も含めて) 2) クラブ への参加
- 現時点で体を動かすと危険であるような状態ではないので、普通に動かすことを推奨します。

母親への言葉かけ

- ワクチンとの因果関係の有無を言及しても、現時点で誰もが明言できるものではありません。
- 日々の症状よりは、まず、日常生活を送ることが重要、という視点を軸にしてみてください。痛みがあっても、動かすことがリスクである疾患に罹患していなければ、過度な安静は、プラスにはなりません。

担当医の提案: 検査に関して

- 1) 採血(膠原病 など含む)
- 2) 頸椎、腰椎MRI
- 3) 神経伝達速度

症例 13歳(初診時) 女性

- 2回目の当科診察までの検査結果
 - 採血(膠原病、他疾患など)異常なし
 - 頸椎MRI異常所見なし
- X年7月 2回目の受診
 - 受診時には下肢症状なし
 - 検査結果異常なしを伝える。
 - **患者の主訴と気持ち**
症状に慣れたということで普通の生活をしている。これでいいかと思う。ただ、部活すると膝が少し痛い時がある。
 - **母親の気持ち**
今後どうなっていくのかが心配。娘は自分の症状を言わなくなったただけなのではと心配
 - **担当医アドバイス**
生活や人生を送っていくことが大切なので、普通の生活ができて
いる今の状態を継続していくことが第一。どのような時にも、そ
に注目して下さい。整形外科の膝専門医に診て頂きましょう。

症例 13歳(初診時) 女性

- 3回目の当科診察までの検査結果
 - 腰椎MRI異常所見なし
 - 整形外科:膝関節、靭帯など問題なし
- X年8月 3回目の受診
- 患者の主訴と気持ち

動かしている時だけ、左ふくらはぎに痛みを感じる。前ほど、まだ思いっきりという感じではないが、体育もしている。伝導速度検査は必要ないと考えている。先生に、生活していくことが重要と言われたので、そのように心がけている。

- 母親の気持ち

子供が生めるのか、この子に子供ができるまで、安心できない。結局対症療法しかなく、今後のことが心配。これ以上、学校を休ませて受診するのも、成績などに関して心配。学校を早退して受診しないでいい近隣にかかりたい。

症例 13歳(初診時) 女性

担当医からのアドバイス

- 現在、学校生活の継続が第一です。
- 過度の安静はプラスにならないが、むろん成長期に部活などで過度の負荷がかかれば、有痛疾患に罹患することもあるので、そのバランスは大切です。
- 運動機能などを客観的に評価したり、歩き方や走り方などに関しては、理学療法士の目からの評価も有用です。

症例 13歳(初診時) 女性

学校を休まず、定期通院が可能な所(当院は遠方)で体の動きに関して、相談できる近医を希望されていることに対して

- 当病院でも理学療法士が関わることは可能であるが、通院が必要なので、学校のことを考えると、休むことになるため、良案ではない。
- 当科へ患者を紹介した整形外科でスポーツ医学を開始→相談できるよう逆紹介とする。変化や悪化があれば当科へ

母親

ワクチンとの関連が不明なままで十分な納得はしていない。

まずは普通の生活をさせることが大切で、適度に動くことは、必要と理解できたので、スポーツ医学の先生とも相談しながらやっていきます。

症例 13歳(初診時) 女性

転帰 X+2年 現在15歳

- HPVワクチンの副反応疑いのために受診した施設として書類申請を請求に母親が来院
- 母親は看護師に書類を預ける時に、
「娘はすっかりよくなりました。でも、諸費用は請求すれば頂けるといことですし、申請をしておいたほうが安心なので、お願いします。大変お世話になりました。」